

INTERVIEW

研究者と国や企業の間立ち、 研究プロジェクトを“契約”というカタチに。

プロジェクト支援室では国や自治体、企業が公募する研究プロジェクトに対する応募可否の判断や、外部から依頼を受けて研究を行う受託研究の契約などを担当しています。その中で、私は主にエネルギー・環境分野に関する民間企業からの受託研究に携わっています。企業への契約内容の説明から契約書の条文調整や予算の執行ルールの確認、計画変更に伴う調整などを行い、研究終了時には研究者と共に成果報告書の作成まで…このように研究者が研究に没頭できるよう、契約業務や連携の調整を支援します。研究内容を決定する際、研究者は自身の興味のある方向へと話を進めがちなところがあるので、そこを軌道修正しながら企業と研究者の間立ち、研究内容の着地点を探るのも私の仕事です。ですから契約手続の事務業務といっても研究のことを理解し、何が課題となっているのかを見極められることが重要です。こうした経験を生かし、将来的にはビジネスモデル構築や、研究者と企業を繋ぐイノベーションコーディネータの業務を行いたいと思っています。



▶ 研究者と積極的に関わることが重要

オン・オフを問わず、研究者との交流が多く、研究に触れる機会も多いので非常に面白い。研究系職員と事務系職員の関係が良好なのも産総研の特徴です。



米山 秀彌

産学官・国際連携推進部 プロジェクト支援室
2011年度入所(理学部・大学院卒)



研究に最も近い場所で、研究者の全てを支えるやりがい。

入所1年目にイノベーション推進企画室で総括業務を担当し、2年目の現在は研究支援グループで電子光技術研究部門を担当しています。ここでは、経理や人事、安全管理など、研究をあらゆる観点から幅広くサポートしています。部門長と二人三脚で部門の運営管理や予算の管理を行ったり、研究者からの問い合わせに対応したりとまさに“研究職に最も近い場所にいる総合職”と言えます。部門付の秘書のような業務もありますが、そこから一步踏み込んで、事務的な側面から研究部門に対する提言を行うことが求められます。非常に業務の幅が広い職種であるため、2年目の私にとっては研究者から寄せられる一つ一つの質問が学びの材料であり、毎日が苦労の連続ですが、課題を解決できた時の研究者からの「ありがとう」の一言が非常にうれしくて、私のモチベーションになっています。研究ユニット支援担当に聞けばなんでも解決する!と研究者から頼られる存在になることを目指して日々勉強しています。今後は、研究活動の支援によって、より担当部門のアピールをしていきたいと考えています。

▶ 1年目の業務が社会人としての基礎に

1年目に所属した部署で本部全体を知る機会を得ました。その経験とやり遂げたという自信が社会人としての基礎になったと感じています。



中谷 結衣

第二研究業務推進部 研究ユニット支援(電子光技術研究部門担当)
2016年度入所(社会情報学部卒)